

論 文

飛脚への眼差し—近世文芸・芸能・伝説から探る—

巻島 隆

はじめに

本稿は、江戸時代の文芸（黄表紙、俳諧、川柳、狂歌）、芸能（歌舞伎、落語）、伝説（狐飛脚伝説）を素材にして、江戸時代における「飛脚問屋」（手紙・荷物の輸送受付、荷役作業、飛脚の手配）及び「飛脚」（手紙・荷物を届ける宰領・脚夫）が、それら作品の創作者・鑑賞者の眼差しにどのように映じていたのか探ろうとしたものである。

文学・映画などにおける郵便配達員（ポストマン）への眼差しをテキスト論によって分析を試みた時実早苗は「国家とは郵便システムであり、権力とはネットワークの支配であり、反権力勢力はネットワークの攪乱、奪取を試みる。その構図において鍵になっているのがポストマンである」¹⁾と述べる。三都の有力な飛脚問屋も幕府・大名の御用を務めることで輸送の独占と円滑な輸送を推し進めたが、近代以降の「郵便配達員」を近世以前の「飛脚問屋」「飛脚」に置き換えて論ずることが可能なのではないかと考える。

描かれ、演じられ、語られる飛脚像をテキスト論の俎上に載せることで、江戸社会における人々の飛脚に対する心的なスタンスを探り得るのではないかと考える。果たして飛脚は江戸期の人々にとって縁遠い存在であったのか、あるいは身近な存在であったのか。またその向こうに何を見ようとしたのであろうか。

筆者は、拙著『江戸の飛脚』（教育評論社、2015年）のコラムで上記テーマを個別に取り上げたことがあるが、紙幅の関係でごく一部にとどまった。そこで本稿では近世文学の黄表紙、俳諧、川柳、狂歌、歌舞伎と落語を素材に作中で描かれる飛脚像に関して読み解きを試みたい。また狐が大名家の飛脚を務めたという狐飛脚伝説を取り上げて、伝説に込められた当時の人々の欲望を剔抉したいと考える。

狐飛脚伝説に関しては「狐飛脚の話」を著した民俗学者の柳田国男は狐と人との交渉に焦点を当てて論じたが、本稿では狐飛脚の伝説が一地域の伝承にとどまらず、北は秋田から西は松江の広範囲にかけてなにゆえに同類型の伝説が存在するのか探ることとする。

なお随筆の中で飛脚に触れたものもあるが、創作性という観点から本稿では扱わない。また近松門左衛門の文楽作品「冥途の飛脚」も上記拙著で、すでに触れているのでこれも割愛する。浮世絵などの絵画史料も先行研究²⁾があるのでそちらを参照されたい。また明治期以降に制作された映画・ドラマ、歴史小説については機会があれば別稿で扱いたい。

なお掲載した狐飛脚を祀る神社の写真は筆者が現地において撮影したものである。

1 時実早苗『ポストマンの詩学』（彩流社、2017年）153頁。

2 杉山伸也「欧米人のみた幕末・明治初期の日本の郵便」（郵政歴史文化研究会編『郵政資料館研究紀要』3、2012年）

1 文学

山東京伝の黄表紙「奇事中洲話（きじもなかずわ）」（北尾重政画、寛政元年〈1789〉葛屋重三郎版）と同「早道節用守（はやみちせつようまもり）」（北尾政寅か北尾重政画、同年葛屋重三郎版）、竹の塚翁「雲飛脚二代羽衣（くもひきやくにだいのほころも）」（北尾重政画、享和元年〈1801〉鶴屋喜右衛門版）の計3作品を取り上げて、作中の飛脚がどのように取り上げられているのか検討する。

（1）山東京伝「奇事中洲話」

飛脚及び飛脚問屋を題材とした近世文学作品で最も知られるのが、人形浄瑠璃作者の近松門左衛門（1653-1724）が実話に基づいて執筆した「冥途の飛脚」である。正徳元年（1711）に竹本義太夫座で初演され、これが当たったため歌舞伎でも上演され、「恋飛脚大和往来」「傾城恋飛脚」は「封印切」「新口村」の段で多くの観衆の袖を濡らした。

時代は下るが、幕府勘定組頭の土山次郎と定飛脚問屋十七屋孫兵衛の越後米・仙台米の不正買い入れ事件を風刺しながら、「冥途の飛脚」に仮託してパロディー化したのが寛政元年（1789）に刊行された山東京伝（1761-1816）作・北尾政美画の黄表紙「飛脚屋忠兵衛 仮住居梅川 奇事中洲話」³⁾である。「雉も鳴かずば撃たれまい」をもじった題名である。

物語の筋立を紹介する。導入の3丁は近松の「冥途の飛脚」の絵（遊女屋で忠兵衛と梅川が遊ぶ場面、飛脚問屋亀屋忠兵衛に捕り手が踏み込む場面〈図1〉、忠兵衛と梅川の道行の場面）

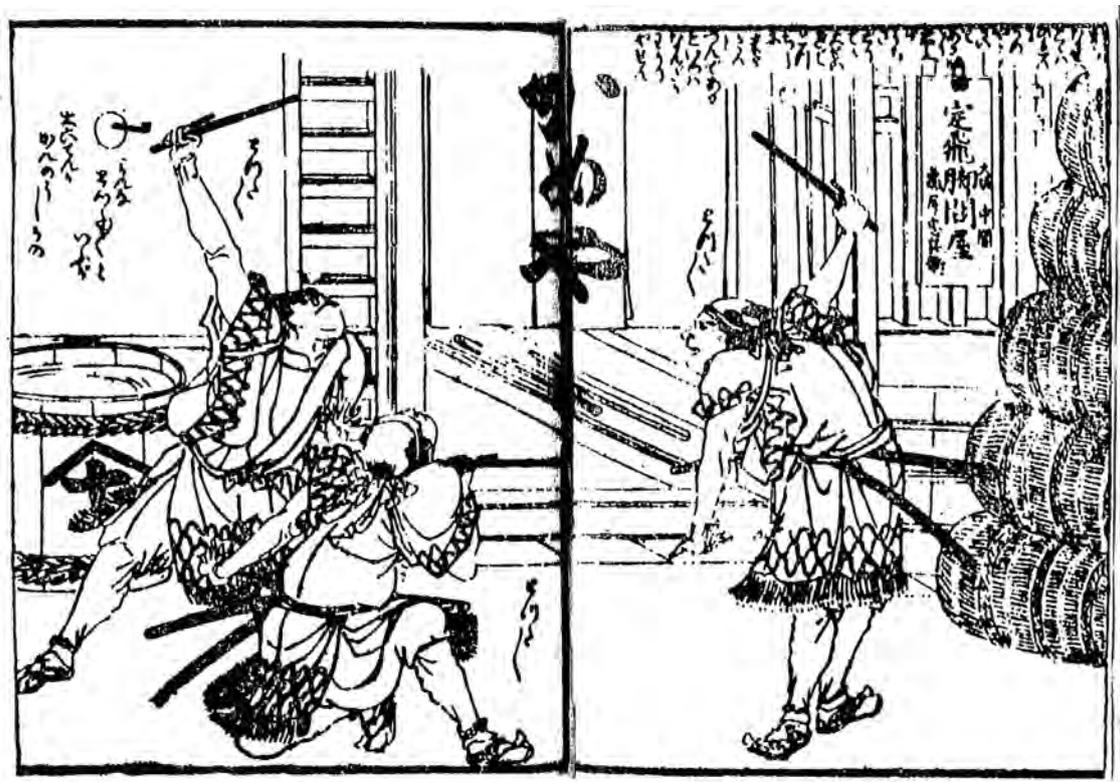


図1 定飛脚問屋「亀屋忠兵衛」。実は十七屋孫兵衛も関わった越後米・仙台米の不正買い上げ事件に擬している。店に踏み込む捕り手の右横に米俵（山東京伝「奇事中洲話」）

3 小池正胤など編『江戸の戯作絵本（三）変革期黄表紙集』（現代教養文庫、1982年）、山東京伝全集編集委員会編『山東京伝全集』第2巻（ペリカン社、1993年）所収。

が掲載され、それを読者がセリフを述べるという変わった趣向で進む。4丁で突然場面が変わり、地獄の主閻魔大王が出てくる。そこへ閻魔に会いに来たという女が登場し、私娼窟だった中洲も吉原の火災で遊女たちが中洲に仮宅を設けたことで地獄が極楽になったと地獄へ来た理由を述べる。三浦の高尾大夫、役者の荻野八重桐といった実在した人物も登場する。高尾と八重桐は死後、地獄で夫婦として暮らしていたが、閻魔大王の寵愛が浅くなったため、「日済の鬼には毎日責められ、大屋の鬼には店立てをくい」という目に遭う。しかし「死んでしまいたく思えども、元が幽霊のことゆえ、死ぬこともならず」と娑婆へ赴く。

忠兵衛と梅川の話に変わる。忠兵衛は、恋の意趣返しを目的に中の嶋の八右衛門の奸計（忠兵衛の紙入れの印判を盗んで証文を偽造し、忠兵衛出入りの御屋敷役人から用米金4万両をだまし取る）のため身の難儀となり、梅川と共に江戸へ出る。新宿に落ち着き、梅川は吉原の三文字屋七兵衛へ「花袖」の名で奉公に出る。忠兵衛は「飛脚屋の縁を引いて」文使い（吉原遊女の手紙を客に届けることを生業とする者）を始め、屋号を「瀬戸屋忠兵衛」（飛脚問屋嶋屋佐右衛門の営業した瀬戸物町をもじる）とする。

一方、地獄から娑婆へ出てきた八重桐と高尾大夫は、瀬戸屋忠兵衛の隣で引手茶屋（客を遊女屋へ案内する）を出すことに。ほどなく八重桐改め「八重蔵」は三文字屋へ通ううちに花袖と親しくなり、忠兵衛が花袖と八重蔵の仲を疑うように。一方、花袖は忠兵衛と高尾が隣同士のため仲を疑い、互いに忠兵衛は八重蔵を、花袖は高尾を憎むようになる。果てには忠兵衛と花袖の生霊が、本来は死霊であるはずの八重蔵と高尾に取りついてしまう。

そこで場面が転じ、大坂から中の嶋八右衛門が中の嶋の役人を引き連れて江戸で忠兵衛と梅川を捜索する。出くわした水茶屋の障子の内で、忠兵衛と梅川の声（実は八重蔵と高尾）を聞きつけ、役人の渋井顔右衛門が捕り手と共に踏み込み、2人を捕縛するが、顔が違うために不思議に思う。ここへ動化に歩いていた土手の道鉄が通りかかり、金子を2人に与え、「これにて、地獄へ立ち帰れ」と生霊を済度したため、忠兵衛と梅川の生霊が立ち去り、また八重蔵と高尾の死霊も消えて、縄ばかりが残る。後に実体の方の忠兵衛と梅川は詮議に遭うが、八右衛門の悪事が露見し、2人は晴れて御赦免となる。両国柳橋の角へ料理茶屋「梅川忠兵衛」を出し、「夫婦、行く末栄えける」とラストを迎える。

この「奇事中洲話」は、実際にあった天明六年（1786）の幕府役人の米不正買付事件を風刺した作品である。同年2月と6月に幕府勘定組頭の土山宗次郎孝之が、江戸室町二丁目の飛脚問屋十七屋孫兵衛に越後米と仙台米を不当に買い付けさせ、その差額を横領したとされる。土山は断罪され、十七屋も手代が処刑され、店が闕所（家財没収）となった。

前頁に掲げた図は、右側に米俵が山積みされていることから、十七屋になぞらえたものであることがわかる。作中で十七屋は「冥途の飛脚」の亀屋忠兵衛に仮託されており、幕府から難詰されても巧みに言い逃れができるように工夫されている。描かれる亀屋忠兵衛の姿は、江戸で文使い「瀬戸屋忠兵衛」として生活し、梅川に一途であり続け、梅川となじみ客の仲を疑って嫉妬に狂って生霊となる存在として描かれる。

黄表紙という性格もあるが、忠兵衛＝飛脚はひたむきさと滑稽味を帯びて描かれる。この作品は、読者が人形浄瑠璃「冥途の飛脚」、特に歌舞伎「恋飛脚大和往来」を熟知していることを前提に創作されたことは明らかである。読者はパロディーを楽しむことができた。

また「飛脚」という仕事がどのような業務内容（例えば、現金を振り出す為替手形を扱う）であるかについても、上方・江戸の読者（様々な階層・身分の者を含む）は認識を共有していたものと言えよう。江戸府内・近国を往来する「町飛脚」、吉原専用の「文使い」など、江戸庶民にとって「飛脚」とは極めて身近な存在であったのである。

(2) 山東京伝「早道節用守」

山東京伝の黄表紙「早道節用守」⁴⁾は「奇事中洲話」と同じ寛政元年の作品である。「早道」とは飛脚の別称である。この作品の主な登場人物は、吉原の遊女「花萩」と、花萩と言い交した主人公の「幸二郎」、そして2人の仲を横恋慕する「悪二郎」の3人。悪二郎は花萩をさらって女房にしたいと思うところに「早道の守り」の存在を知る。守りを所持するのは大谷徳二。守りは韋駄天(「事は金光明経に見ゆ」)から蜚廉(「善走る殷の紂王につかゆ」)、さらに戴宗(「唐土梁山泊の義士○又神行大保と号す、一日に千里を走る叟は水滸伝に見ゆ」)を経て駒谷三郎平(「早道の名人なり、宇治の常悦にしたがふ、叟は白石嘶に見ゆ」)へと相伝された。徳二は「先年中村座にて将門冠初雪という名題狂言の時、桜田左交より此守を授かる」というものであった。この早道の守り(「韋駄天の守り」とも)は誰でも首にかけると、たちまち駆け出し「幾万里も行かるゝ」という守りである。

ところが、悪二郎は盗みに入って守りを盗んだところ、徳二に声をかけられてしまい、とっさに徳二の下男「損三(そんぞ)」の首に守りをかけてしまう。寝ていた損三はそのまま駆け出し、天竺まで駆けてしまう。そこへ羅漢が現れ、損三を見つけ、釈迦如来へ報告しようとするが、ちょうど釈迦如来の現れたところで損三は「守りの徳を見せん」と象の鼻に守りを掛けたところ、象が走り出す。象は秦の始皇帝の住む阿房宮に辿り着く。門番の官人は守りを始皇帝へ差し出した。後宮に美女3000人を抱える始皇帝は「テレメンテイコ」(日本の言葉に通じる家臣)に命じて、江戸の吉原へ赴き、美女を連れてくるように命ずる。早道の守りを首に掛けたテレメンテイコは「唐人矢の如しだ」と浅草の山門へ。長崎屋を旅宿とし、吉原で客の振りをして品定めをし、花魁の花萩を始皇帝に差し出そうと決める。

心ならずも身請けされた花萩はテレメンテイコに背負われて、早道の守りで秦へ赴き、始皇帝の寵愛を受けることに。始皇帝が酒宴を催した折、花萩は盃の「合」を他の後宮の3000人に頼もうとするが、1人として引き受けない。そこで花萩はテレメンテイコを召し出し、吉原の全盛の女郎「鳩照(におてる)」に合をさせようとする。テレメンテイコは道中で「先達て日本へ行し時、道にて銭を落としたるに懲りて、今度は両口の袋を拵へて、その中へ銭を入・腰に挟んで走る。是にて至極利方よきゆへ、今にこれを早道と名付け、日本人も用ゆる事になりぬ」と早道=飛脚の由来が記される。

テレメンテイコは鳩照に合(酌)をさせて戻ろうとするが、日本堤で悪二郎の待ち伏せに遭い、手傷を負わされて早道の守りを奪われてしまう。悪二郎は守りを首に提げて、秦の阿房宮へ忍び入る。花萩に騒がれまいと猿轡を嚙ませ、棒縛りにして盗み出そうとする。ところが、宮中の唐人に発見されてしまい、悪二郎は捕らえられ、守りを首に掛けていた花萩だけが走り出してしまう。「ウンウンウン」言いながらも日本に戻った花萩は幸二郎と再会する。花萩は一部始終を幸二郎に打ち明ける。幸二郎は早道の守りを商売道具にして早飛脚屋を始め、天竺、唐、オランダへも手紙や荷物を届けて成功を収める(図2参照)。かくして物語はハッピーエンドで締めくくられる。以下に物語の締めくくりを引用しておく。

幸二郎、思ひがけなく再び花萩に逢ひ、かの守りの徳、悪二郎が訳も委しく聞き、大に喜び、かの守りをもつて大千世界早飛脚屋の見世を出し、大きに流行り大金を儲けける。されば幸二郎は、物入もせず花萩を女房にし、悪二郎は、おのが邪なる心より、千万里を隔てし唐土にて身を果したるゆへ、諺に幸二ものを入れず、悪二千里を走るとは、今の世まで

4 前掲『山東京伝全集』第2巻所収。



図2 「早道の守り(韋駄天の守り)」を商売道具に、幸二郎は唐・天竺・和蘭へと通ずる早飛脚屋を開業し、大儲けをする。かくて遊女花萩と結ばれる。後ろの懸看板に「万国通路／飛切無類早飛脚屋／いたてんや／幸二郎」とある(山東京伝「早道節用守」)

も言ひ残しける。

「わしは浪人者じやが、天竺へ手紙を一つ本届けたい」

「昨日、和蘭へ福輪糖を買いにやりましたが、賃銭が廿四文さ。これから見れば、柳橋から堀へ、百は高いものだ」

〔万国 通路 飛切無類早飛脚屋 いたてんや 幸二郎〕(傍線部筆者)

「早道節用守」は、恋仲の男女と横恋慕を軸に「早道の守り」という突飛な要素加えて成立させた荒唐無稽の物語であるが、ここには飛脚に対する期待・願望が潜んでいるようにも思われる。最初の傍線部に注目してほしいが、大千世界早飛脚屋の店を始めたところ、大いに流行って大金を稼いだのだとある。これは現実の飛脚屋のイメージともかぶることが想像される。これは飛脚屋が儲かる商売であるという、江戸の読者が納得し、共有し得る先入観であったとも言い替えが可能である。殊にそれが「大千世界」どこへでも行けるから(今でいう「国際郵便」に相当しよう)、非常に利益を上げることができたのだという。

2番目の傍線部の「天竺へ手紙を一つ本届けたい」、続く「和蘭へ福輪糖を買いにやりましたが、賃銭が廿四文さ」のフレーズは江戸の人々の世界観をも示しており、唐(中国)・天竺(インド)・和蘭(オランダ)の三国を中心としている。江戸の読者は、遠く海外にもあつという間に手紙を届けることができたなら、また格安料金で海外の産物を入手できればという箇所にも共感と共に憧憬を抱いたことであろう。即ち神業また神速こそが江戸の人々の欲望であったとも言える。この“江戸の欲望”を、現代日本は実現させたのだと言えよう。

(3) 竹塚竹翁「雲飛脚二代羽衣」

「雲飛脚二代羽衣」⁵⁾は序文末尾に「竹の塚の農夫 竹翁なる者乎」の署名・印があり、作品の末尾に「竹の塚翁作」とある。早稲田大学図書館データには「竹塚東子」(?-1815)とあり、作画は北尾重政(1739-1820)とある。序文末尾に「辛酉上春」とあり、この干支は享和元年(1801)を指している。以下に物語の筋立を紹介する。

三保の松原で天女が羽衣を松にかけて下着姿でいたところ、空を飛んでいた「きまぐれてんぐ」がその姿を見て「へへいひほひだ、はながひくひくする」という。気まぐれ天狗は天女を女房にしようと、天女を抱えて抱えて飛んでいく。あたかも久米仙人を思わせるシーンである。ちょうど釣りに来ていた伯蔵が羽衣を見つけて、「とんだものがてにいつた」と家に持ち帰る。人々に始終を話し聞かせると、近所の評判となり、見物に来る者も現れた。

それより伯蔵は町へ出て、「諸国御ひやく所」(図3参照)と大きく看板を出しておいた。通りすがりの人が看板を見て「これかほんの飛脚た飛脚、さんどむちをうつても百里一日ハておもひ〜」と別の人と談笑している。

ある金持ちの隠居が不老不死の薬を求めていたところ、こんろんの辰巳の方角に仙人の住む所があり、仙人の名を安毛羅紺という。隠居は羽衣屋を呼んで、「その方は不思議の衣を飛行自在の由。何卒長命の薬を取りて得させる、さあならばその方ののぞみにまかすべしとずいぶいそげいそげとろ金二百両御内わたしなり」と告げる。伯蔵は200両を受け取り、そのうち2



図3 「百里一日／千里十日／羽衣屋／御飛脚／伯蔵」とある(竹の塚翁「雲飛脚二代羽衣」、早稲田大学図書館古典籍総合データベースから)

5 竹の塚翁作・北尾重政画「雲飛脚二代羽衣」は早稲田大学図書館古典籍総合データベース、国立国会図書館デジタルコレクションにて閲覧可能。

割を親分に預け、路銀を少々持って飛び立ち、2000里来たところで休んでいたところ、この国の餌差（鷹の餌となる小鳥を捕る者、鷹匠配下）が通りかかり、伯蔵を渡り鳥と間違えて捕まえてしまう。鳥かごに入れられた伯蔵は、大王に献上される。伯蔵はいろいろと訳を説明するが、言葉が通じない。大王はさえずりを気に入り、珍しい鳥を手に入れたと餌差らに褒美を与えた。

伯蔵は、大王に半年ほど飼われていたが、自分たちだけで楽しむのもと、大王が出入りの町人に与えて「諸人に見すべし」と仰せになったので、町人たちは盛り場へ行き、伯蔵を見世物にした。伯蔵は舞拍子が合わないので、唐人に日本の唄を教え、いろいろ所作事をしたため、大繫盛となった。「人間の行方もいろいろな目にあふものなり」との感慨が挿入される。町人も大金を得て、大王の計らいで伯蔵は暇を申し渡された。町人は伯蔵を海岸に見送る際、「はごろものきつつなるれば天津さへおとめ申すもなミだなりけり」と狂歌を贈った。

伯蔵は飛び続け、山の中で猿取の鷲蔵、賜なの鶴八、蛇食いの鴻助といった悪玉に捕まり、なぐられた上に羽衣の毛をさんざんにむしり取られてしまう。飛ぶことができなくなった伯蔵は山中をさまようが、一軒の家を見つけ、宿を頼む。その家には天女をさらって女房にした気まぐれ天狗がおり、心を入れ換えて学問に精を出していた。戸をたたき音に出てみると、破れた羽衣をまとった男。いぶかしみながら伯蔵に尋ねると、伯蔵は一部始終を説明した。そして羽衣を「おかへしもうす。何とぞ私を国へおかへし下され、そして長命のくすりがあらばおしへ下され」と泣いて頼んだ。

天狗は伯蔵に「これすなはち長命長寿のやくほう書なり、これをそのたのしゆにさし上げ御用あらば長じゅうたがいなし。一刻もはやくかへり給へ」と伯蔵を促す。伯蔵は「これハこれハありかたふござります。わたくしも今日にも出立いたしとうござれど、はごろもをおかへし申ましたゆへとぶことがなりませぬ。何とぞぬしさまのおはりきを祢がひ上ます」と頼む。天狗は伯蔵を背に乗せて日本へ飛び立つ。ここで「いんじゃてんぐハ仁者ニして伯蔵をいたはりワがは祢にのせて日本へたつとのまにかかりつれる此てんぐもひきやくをすれば大金をもふけるだろうがよくしんハなきものとミへる」と記される。「おはりき」とは御羽力であろう。

帰国した伯蔵はまず親分の所へ行って顛末を話し、その上で金持ちの隠居のもとへ赴いて事の次第を報告した。隠居は喜んで書物を開いてみると、そこには「夫命ハ不定なり、されど其鳥もち方に電り、此書にいわゆるきんもつの品をさけて仁慈礼義信の五米を持参すべし。大酒、淫乱、悪喰、短気、癩癩、不実、不仁、不義、非道、非義、此おもむきをよくよくつつしミあらば長寿長命富貴心のままなるべし、わけていんとくをつねに用ゆべしとミへたり、たちまちはつめい（筆者注、発明）あそバされ御長命ハつるかめ（筆者注、鶴亀）にてごねんしに上ル、くらひなるべし」と記される。伯蔵は太守（隠居）より金3000両を賜り、多数の巻物を頂戴してにわか大富貴の身となった。

この作品はまだ活字化されていないので、長々と物語のあらすじを示したが、羽衣を纏うことで飛行可能な飛脚が描かれている。江戸時代の人々の夢であったのであろう。飛脚屋を営業して大金を経た伯蔵は、「早道節用集」の「早道の守り」を道具に大利を得た幸二郎とも重なる。アメリカンドリームならぬ“エドドリーム”であったとも形容し得よう。

2 俳諧

ここでは俳諧作品を素材に作中の飛脚を検討する。俳諧は五七五の17文字の中に「飛脚」の2字そのものを盛り込んだものが多い。ほんの瞬間を切り取った観察者の中に読み手と飛脚と

の距離が窺われるように思われる。巻末の付表1を参照しながら作品を紹介したい。

秋立て相場飛脚や急覧 (No.1)

「急覧」は「いそぐらん」と読ませる。秋は収穫の秋である。全国各地の米が千石船に満載され、海上輸送で大坂に廻米された。そのことは堂島米市場の相場に影響を与えたのであろう。先物取引を行う相場師たちにとって相場の高下は一番の関心事である。相場飛脚とは相場を伝達する米飛脚のことである⁶⁾。急ぐらんは当然のことである。

はや飛脚舟と陸との其間 (No.4)

江戸時代の輸送事情は水運と陸運の2つのみである。船と陸とのその間とは、例えば、産地における早飛脚は生産地と特産物を船積みする河岸までの間を取り持つ役割も果たしたことを詠んでいるのであろう。物流の妙を巧みに捉えた作品であると言えよう。

飛脚宿かはらぬ春の花咲て (No.6)

定宿としている飛脚宿に常に変わらぬ春の花が咲いていることよ。「飛脚宿」とは飛脚(宰領飛脚、走り飛脚)が定宿とした旅籠(便宜がよいため飛脚問屋の取次所を兼ねる場合もあった)をいう。飛脚宿は清潔とされており、24時間風呂が入れるので旅人の間でも評価が高かったという。そのことを逆手に取って、旅人宿が「飛脚宿」を表立って宣伝する向きがあった。飛脚にとって「飛脚宿」の語彙は意味を持たない。商人や旅人が「飛脚宿」であるかどうかで宿泊するかしまいかの判断基準としたのである。

俳諧作品における飛脚像は、抒情あふれる作品であるよりも、No.12~20によく示されているようにやや滑稽味を持つ場合が多い。そうした趣の方が飛脚を題材に詠みやすかったのであろうか。次章以降で扱う川柳や狂歌作品には飛脚を題材としたものが比較して多い。私生活では飛脚を使っている松尾芭蕉(1644-94)であるが、その俳諧作品の中には「飛脚」を詠んだものが1つもなく、蕉風を復活しようとした与謝蕪村(1716-83)にはNo.21~24の4つが確認できる。飛脚問屋「嶋屋佐右衛門」の営業者の1人である俳諧師の安井大江丸(1722-1805)と親交のあったとされる蕪村は、恐らく飛脚商売への関心も強かったのではないだろうか。そうした友人関係の有無が作品数にも表れたのではないかと考えられる。

3 川柳

川柳とは機知を働かせ、17文字で人情・風俗・世相などを読み込んだ短詩文学のことである。俳諧の前句付(七七の短句〈前句〉に五七五の長句(付句)を付ける)の付句が独立したものであり、江戸中期に柄井川柳(1718-90)が前句付の点者だったことから川柳と呼ばれた。柄井川柳は万句合から選んだ川柳作品を『誹風柳多留』として出版した。この『誹風柳多留』の中に飛脚を詠み込んだ川柳作品が散見されるので取り上げる。巻末付表2を参照されたい。

あさてはそばで見ますと島屋いひ (No.2)

文字通り明後日には宛先の側で見ますと嶋屋が言ったという作品であるが、これは江戸の嶋屋が三日限で京都に書状を届ければ、確かに明後日には宛て人が直接読む姿を目にすることができる。

三度飛脚に去り状が着く (No.35)

「去り状」は離縁状、即ち三行半である。「三度」の三と「三行半」の三とを掛けており、心

6 高槻泰郎「近世日本における相場情報の伝達—米飛脚と旗振り通信—」(『郵政資料館研究紀要』2、2011年)

憎い作品である。離縁を望む女性のための縁切寺である鎌倉の東慶寺、上州世良田の満徳寺には専用の飛脚が抱えられており、離縁の手続きの際に往来している。この場合、三度飛脚が旅の空を住处とするあまり、長屋のかかあが愛想をつかして三度飛脚の夫に三行半を送り付けたという意味である。ただ本来、三行半は夫が書いて妻に渡すものである。三行半の本文のみ妻が書き、署名・捺印だけしると妻が離縁状を送り付けたということであれば、この川柳の意味は通る。

十七屋もめん合羽へ馬を入レ (No40)

十七屋とは江戸室町二丁目に店を構えた十七屋孫兵衛のことである。その十七屋の宰領飛脚が騎乗して荷物を輸送する際、自分の木綿合羽（雨具、引回しともいう）に馬をすっぽりと入れている情景を詠んでいる。雨が降ってきたからであろう。宰領の優しさがにじむ作品である。

師走の飛脚長い脇差 (No46)

師走は越年の準備に入る12月のこと。越年の準備には金が必要であるが、中には不当な手段によって金を手に入れる者たちもいる。現金を運ぶ金飛脚は常に護身用の脇差を帯刀しているが、師走になるとさらに物騒ということで、より長い脇差になるということ。

蘇武が飛脚を由利雅が飛脚取 (No49)

前漢に仕えた蘇武（BC140頃-BC60）が匈奴に囚われの身となり、漢に手紙を届けるのに雁の脚に結び付けたという「雁の使い」の故事がある。「由利雅」とは幸若舞の「百合若大臣」のこと。百合若大臣はちくらが沖で蒙古軍を攻め降した帰りに玄海島に置き去りにされてしまうが、国から鷹の使いが飛来し、国に戻って悪臣を滅ぼすという筋立てである。どちらも雁と鷹が使い＝飛脚となっている。蘇武が用いた飛脚を百合若大臣が取ったという作品である。関連して「外がはま蘇武が飛脚が風呂を立テ」は外ヶ浜（津軽半島の陸奥湾沿岸の海浜）で蘇武の飛脚が風呂を沸かしたという意味。また「鷹と鴈和漢飛脚を相勤メ」（No50）は鷹と雁がそれぞれ日本と漢で飛脚を務めたことを詠っている。

旅と思わず飛脚出て行く (No51)

飛脚にとっての職場は旅の空の下街道である。だから飛脚にとって旅とは仕事に出かけると同義である。飛脚は旅と思わずに出立するのが常である。

俳諧と川柳は、同数文字の文芸であるが、どちらかという滑稽味を盛り込んだ川柳に作品数が多い。黄表紙の中に描かれる飛脚とも通底するものがあるが、川柳に飛脚を盛り込んだ方が明らかに飛脚の姿や持ち味のユニークさ、ユーモラスぶりが際立ったということなのであろうか。

4 狂歌

狂歌は五七五七七の31文字の短歌形式を取る。元々ある短歌作品を本歌取りしながら滑稽・洒落・風刺を利かした遊戯的な和歌のことである。つまり著名な短歌作品のパロディーとも言える。特に天明年間（1781-89）は天明の狂歌ブームと言われるように、流行の火付け役となった太田蜀山人（1749-1823）、四方赤良、朱楽菅江などの狂歌師が活躍した。

ここでも『江戸の飛脚』で紹介した作品以外のものを取り上げて解説を試みたい。巻末の表3を参照されたい。

水かへる佐渡の嶋やの穴蔵はかせ包みの金も出けり (No.1)

佐渡送りにされた囚人には地獄の佐渡金山である。地下へと掘った坑道では湧き出す水を汲み上げる重労働が待っている。その「佐渡の嶋やの穴蔵」と「嶋屋の穴蔵」を掛けている。穴蔵は火災時に貴重品を放り込んでおく地下蔵を言うが、佐渡金山の穴蔵と嶋屋の穴蔵には「か

はせ」即ち「為替」包みの金も出ると詠んでいる。

こくちには縄も千鳥にかよはせて淡路嶋やのなみの送り荷 (No.2)

よく考え抜かれた作品である。「こくち」は「小口」荷物。縄は梱包の縄。「千鳥に通わせて」は縄を千鳥は「千鳥掛」(ちどりがけ、糸緒などを互いに斜めに打ち違えて掛けること)に括弧を言うのであろう。「淡路嶋やのなみの送り荷」は淡路島と淡路「嶋屋」、波と「並(便)」を掛けている。

松坂の嶋やてふ名の飛脚やにいせより来たる状も配りつ (No.5)

右は素直な作品である。伊勢国松坂の「嶋屋」という名の飛脚屋に伊勢より届いた書状を配ることよ、と取れる。

股引の目くら嶋やの定飛脚またにかけてそありくうまや路 (No.8)

「目くら嶋」とは「盲縞」のこと。経糸・横糸ともに紺色に染めて平織にした綿布をいう。盲縞でできた股引を履く定飛脚が馬に跨りつつ騎馬歩行しているが、「うまや路」は馬小屋と街道の両義を意味する。

文字文字とせすて飛脚のはしり書京やより出る赤紙の状 (No.11)

「文字文字」は「もじもじ」、「はしり書」は「走り駈く」に掛けている。「せすて」は「為すて」(したもうて)の意味である。京屋から出る赤紙の状とは書状の包に赤色の小さな短冊を付けた早状のことを指している。

碁盤目の京やは四九の先手後手打て違ひにたつ定飛脚 (No.14)

これはわかりやすい作品である。碁盤目のように街路が縦横に行き交う京都。囲碁は碁盤に黒と白の石を先手と後手と交代で打つわけであるが、飛脚問屋が四と九の付く差立日に交互に定飛脚が荷物と共に出立する様子を詠んでいる。『広辞苑』によると、「四九(しく)」はめぐりカルタで行う賭博を指すことから、あるいは賭け囲碁のことを掛けているのかもしれない。

都へとのほる京やの定飛脚しひれをきらす雪の朝立 (No.15)

雪が降り積もった早朝に、今まさに京都へ上ろうとする京屋の定飛脚が空模様を気にしながら、しびれを切らして、即ち待ちくたびれて旅だった様子を詠んでいる。

あちこちへあしをはかりにかけまはる人も目方つかふ飛脚屋 (No.16)

飛脚問屋には荷物の重さを計量するための天秤が設置されている。「あちこちへ」は文字通り「彼方此方」である。「あし」は飛脚の足と金(お足ともいう)とを掛ける。「はかり」は「秤」と「(足を)ばかりに」で掛ける。「かけまはる」は秤で「かける」と飛脚が「駆け回る」に掛ける。つまり人も目方で使う飛脚屋であることよという意味である。

雁皮紙に書しもあらんふみをもて霞か関を過るひきやく屋 (No.20)

雁皮紙は和紙の一種であり、『広辞苑』によると、雁皮の樹皮の繊維を原料として漉き、表面を柔らかい刷毛で擦って滑らかにした上品な和紙。蘇武の故事を踏まえつつ“雁”皮紙に書き付けた「ふみ」=書状を持って霞が関を走りすぎる飛脚屋と詠んでいる。もう少し深読みすると、雁皮紙に「雁行」(空を飛ぶ雁の行列)の意味も付帯させ、旅立ちの意も込めているのかもしれない。

かへる雁空に見なして北国の吉原へしもいそく飛脚屋 (No.21)

「北国の吉原」とは江戸日本橋から見ると、遊郭の吉原は北側に位置する。その吉原へ雁皮紙へ書き付けた文を急ぎ届ける飛脚の姿がある。北国へと帰る雁の姿と吉原へと急ぐ飛脚とを重ねているのであろう。

亀戸なる藤の便りもむらさきの江戸の飛脚へたのみこそすれ (No.22)

亀戸天神は藤の花の名所である。その紫色の花が咲いたという情報を「江戸の飛脚」即ち江

戸行き飛脚屋に頼んだからこそ聞くことができたという感慨を詠んでいる。狂歌というよりも和歌に近い作品とも言えよう。

蓬萊の島屋かもとに鶴ならていた、き赤き早状も見ゆ (No.23)

蓬萊とは、中国の東海中にあるという仙人の住む蓬萊島のこと。嶋屋のもとに早状が「いたたき」即ち届いた。「いたたき」は丹頂鶴の頭頂部の赤色と早状に付ける赤紙とを掛けている。また鶴は、仙人が鶴に乗って飛翔する意味と共に「首を長くして待ち望む」ことを意味する「鶴首」の意味も含んでいる。二重三重に意味が込められ、ユニークな作品である。

時つけの飛脚より猶はや手風吹こして行あしからの関 (No.24)

直訳すると、「時つけの飛脚」よりもなお早い風が足柄の関（箱根の関所）を吹きこして行くことよということ。「時つけ」は「時つ風」即ち季節または時刻によって吹く風のことを意味する。「はや手風」とは「疾風」（はやて）のこと。

川柳作品に数が劣らぬほど、狂歌作品にも飛脚が登場することが確認できた。恐らく走ることの少ない江戸期の人々にとって飛脚は姿態・動作が極めて目立つ存在であり、川柳同様に格好の題材であったのであろう。狂歌の中の飛脚は本歌の力によるものか、風刺の中にやや風雅さをも微かに匂わせる。飛脚の輸送システムを利用客として知り、飛脚便の種類も弁えているからこそその作品群であると言えよう。

5 歌舞伎

近松門左衛門の人形浄瑠璃作品「冥途の飛脚」の当たりの影響は歌舞伎にまで及んだ。このことはすでに触れたが、むしろ歌舞伎こそが「冥途の飛脚」を親炙させたと言えるであろう。「封印切」「新口村」の段は「恋飛脚大和往来」「傾城恋飛脚」の代名詞のように浸透した。先述の黄表紙「奇事中洲話」など3作品にもパロディーとして描かれるなど広がりを見せた。

(1) 恋飛脚大和往来

歌舞伎「恋飛脚大和往来」は、近松門左衛門の文楽「冥途の飛脚」が原作である。その後、正徳3年（1713）、紀海音によって「傾城三度笠」として改作されて上演された。さらに安永2年（1773）、「傾城恋飛脚」として豊竹座で上演され、これが歌舞伎では「恋飛脚大和往来」として上演された。「こいのたよりやまとおうらい」と読むのが正しいとされる⁷⁾。

「恋飛脚大和往来」は俗に「封印切（ふういんぎり）」とも呼ばれる「新町揚屋の場」と「新口村（にのくちむら）」から構成される。「新町揚屋の場」で原作の「冥途の飛脚」と異なるのは、「冥途…」では忠兵衛の親友であるはずの丹波屋八右衛門が「恋飛脚…」では梅川を巡って恋敵となる点である。この場の最大の見せ場は飛脚問屋亀屋忠兵衛が封印されている客からの為替金300両に手を付けてしまい、封印を切って小判をばらまく箇所である。なじみの遊女梅川を身請けするどころか、客の金に手を付けてしまい、斬首は免れまいと郷里大和国へと道行となる。

「新町揚屋の場」で丹波屋八右衛門が興味深いセリフを吐くシーンがある。飛脚問屋の特徴をよくつかんでいるので引用する。

ムム何だ、人に頼まれたとは何の事だ。大方意気地なしの忠兵衛が頼んだか。治右衛門、そりや悪い合点だ。尤も千両と二千両の金は取扱ふやうなれど、ありやァみんな人の物だ。

7 戸板康二編『歌舞伎名作選』第三卷（創元社、1953年）298頁

金に一夜の宿を貸す飛脚屋商売、おのれが物といふたら家屋敷に家財ばかりで、ようよう二三十両に足らぬ身代、それで二百五十両才覚せうとは盗人をするより外はねえ、逆さにしても鼻血は出ようが、三文でも出る気遣ひなし、手附に打つた五十両の金も、どこから出たと思やァ、おれが所へ来る江戸の為替のその金を、途中でくすねた盗人同然、その尻が割れて催促すりやァ、とこぼえ廻つて手を合し、仏のやうなおれを欺して請取を書かせた大騙り、どうで仕舞は親の勘当、追付菰を冠つてのたれ死、みぢめなざまを見るやうだ⁽⁸⁾。

飛脚問屋の本質を突いた言葉である。現代の銀行業も客から預かった現金を企業に貸し付け、その利息で収益を上げている。送金・預り金を請け負う飛脚問屋は、銀行と共通する点が多い。つまり商品売って稼いで持参した丹波屋八右衛門の金250両と、手渡さねばならぬ封印小判を懐に持つ忠兵衛の300両とは全く質の違う現金ということである。

「新口村」は、雪降る中を亀屋忠兵衛と梅川が手に手を取って忠兵衛の郷里である大和国の新口村へと落ち延びる場面を描く。死ぬならば故郷の村でと考える忠兵衛が実父孫右衛門に仕えていた忠三郎を頼る。だが、村にはすでに手配が回っており、寄合から帰宅途中に転倒した孫右衛門を前に出て行けぬ忠兵衛、代わりに介抱する梅川。それとなく察した孫右衛門だったが、養い親妙閑に遠慮して忠兵衛に会おうとしない。戸口の裏で様子を見守る忠兵衛。父の義理堅さと親子の情愛が見る者に切々と訴える場面である。

この作品は、近松が得意とした心中物の1つであり、他の作品に見られる男女一對の悲恋が描かれる。亀屋忠兵衛は飛脚問屋に養子で入った者であるが、手を付けてはいけない客の金に断腸の思いで手を付けてしまう。個人的事情から客の金を横領してしまうのだから、本来は情状酌量の余地もない。情と法の板挟みに苦しむ忠兵衛と梅川の逃避行の先に待つものは幸福ではない。

実際の飛脚問屋は現金輸送の受注を請け負い、街道を往来する飛脚は直接輸送に当たるわけであるから、現金横領の欲望に駆られる場面も数多くあったであろう。それでも商売は信用第一だから、近松も忠兵衛と梅川にハッピーエンドを約束しない。それだけに先に紹介した「奇事中洲話」のパロディーではハッピーエンドが用意されているだけに、それが読者には一層のこと歓迎されたのであろう。

(2) 御存鈴ヶ森

歌舞伎「御存鈴ヶ森」(ごぞんじすずがもり)に飛脚が登場する。舞台は仕置場の鈴ヶ森。供養の石塔が立ち並ぶ中、夜間は雲助が集まる。雲助とは街道を職場とする住所不定の人足である。そこへ御状箱を担いだ飛脚が1人でやってくる。雲助たちに襲われ、身ぐるみはがされた飛脚は、雲助に「仲間にしてくれ」と御状箱を雲助たちに差し出してしまふ。

ところが、その御状箱には白井権八を差し出した者には褒美を出すという手配書が入っていた。それを讀んだ雲助の1人が思い当たることがあるので、待ち伏せすることに。そこへ駕籠がやってくる。乗っている若衆が白井権八だと、雲助たちが襲撃するも、通りかかった本当の白井権八に斬られてしまふ。駕籠かき人足は逃げてしまふ、駕籠だけが残される。権八が立ち去ろうとしたところ、駕籠の中の権八と間違われた人物が声をかける。実は男は有名な侠客幡随院長兵衛であった。権八の身の上話を聞いた長兵衛は、江戸で仕官を望む権八に協力を約束する。2人は再会を約して別れる。

鈴ヶ森は東海道沿いにある処刑場であるが、御状箱を担いだ飛脚が雲助たちに身ぐるみはが

8 「恋飛脚大和往来」(戸板康二編『歌舞伎名作選』第三巻) 128頁

されてしまうという設定は、飛脚が盗人たちに目を付けられやすかった事実を示している。舞台を鑑賞する観客にとっても「さもありなん」と納得の行く場面であったのであろう。飛脚も元々は人足である。襲う方も襲われる方も同根であるが故に滑稽さが際立つ。

であるが故に襲われた飛脚が御状箱を差し出しながら雲助たちの仲間にしてもらえるように請う姿は、一層ユーモラスにあふれている。川柳に出てきそうな場面ですらある。歌舞伎の中に登場する飛脚たちの姿は極めて人間臭い。だからこそ観衆の心を引き付けたものと思われる。

6 落語

(1) 明石飛脚

古典落語に「明石飛脚」「堺飛脚」⁹⁾がある。「明石飛脚」は「明石飛脚」「雪隠飛脚」「うわばみ飛脚」の3部構成となっており、短い話を連続して語る形式となっている。

「明石飛脚」は、大坂の飛脚が明石まで手紙を届け、その帰り道も含めた道中の様子がユーモラスに語られる。ある男が客に「明石まで手紙を届けたいと思うて、飛脚宿へ頼みに赴いたところが、出払ろうと誰も手が無いのや、おまはんは足が自慢やさかい」と明石までの飛脚を依頼される。男は手甲・脚絆・草鞋ばきと姿を整えると明石へ向けて走り出す。大坂から明石までは道のり15里。飛脚が「や、どっこいさのさ」の掛け声で走ると同時に囃子が入る。飛脚が途中で場所を尋ねると、「西宮」の答えに、さらに「大坂から明石までなんぼおますやろ」と聞く。すると「大坂から明石まで15里といいまん」との返事。さらに掛け声、囃子が入り、また場所を尋ねる。今度は三宮であるが、大坂から明石までの距離を尋ねると、やはり15里の答え。

さらに兵庫、須磨、舞子まで同じ問答を繰り返して話が進行する。飛脚が夕方前に明石の町に入ると、「人丸さん」(柿本人麻呂を祀った人丸神社のこと)の境内に飛び込む。そこの茶店の床几へどっと横になると、飛脚は寝てしまう。しばらくして茶店の主人から店じまいを告げられる。飛脚が場所を尋ねると主人は「人丸さんも知らんのかいな。明石の人丸さんでっせ」との由。飛脚は「明石、ここは明石だっか、ああ、走るより寝てるほうが早かった」とオチが付く。

話は続いて「雪隠飛脚(せっちんひきやく)」に移る。明石まで手紙を届けた飛脚が今度は帰り道を急ごうと、近道、近回りをしようとする。畦道や境内を通る度に囃子がかかる。飛脚は急に厠へ行きたくなる。「昔から小便一町、糞八町という言葉があるが」と言いつつ、田んぼのそばの野雪隠に駆け込んだ。飛脚がしゃがみ込むと懐から握り飯の包みが下へストーンと落ちる。飛脚は「ああ近道をしよった」とオチを一言もらす。

さらに続けて「うわばみ飛脚」に移行する。厠で用を足した飛脚だが、近道を選ぶあまりにとうとう山の中へ迷い込んでしまう。その姿を見つけたのが山に古くから棲むという蟒蛇(うわばみ)。「おう、向こうから飛脚がやって来たな、有難い、久しぶりに人間が喰えるぞ、ようし」と大きな口を開けて道で待ち構えていると、飛脚はお構いなしに口に飛び込み、走り続ける。さすがに飛脚も「うわっ、こりゃどうじゃ、一ぺんに日か暮れた」となるが、構わずに走り続ける。すると「向こうのほうにあかりがチラチラ見えて来たぞ」とスポッとうわばみの肛門を抜けてしまうと、そのまま走り去った。その後ろ姿を見送る蟒蛇は「しもた、禪をしとけばよかった」とオチを語る。

9 「明石飛脚」は桂米朝『米朝上方落語選』(立風書房、1970年)に所収。「堺飛脚」(1991年上演)はCD「桂米朝落語全集」第28集(東芝EMI、1992年)に収められている。

(2) 堺飛脚

「堺飛脚」(9分55秒)はユーモラスな怪談となっている。近郷に手紙を届ける専門の町飛脚が夜中に得意先に、大坂船場から堺大浜まで手紙を届けてくれるように依頼される。堺筋を南へと走ったり、歩いたりしながら飛脚が森へ差し掛かると、狸の化けた一つ目小僧に遭遇する。さらに唐傘、高入道、のっぺらぼうと出会う。その度に飛脚が「ド狸」とどやしつけ、怖がらせる手口が「古い古い」となじると、いずれも姿を消してしまう。ようやく夜明けに飛脚が海岸へ出ると、波が寄せては引く中に1尺の鯛が砂浜に打ち上げられているのを見つけた。飛脚は「いい土産ができた」と喜ぶが、その鯛がグルッと目を向いて「これでも古いかい?」と言うオチが付く。

最後に落語ではないが、江戸の笑い話を紹介する。「江戸の大火を報せる飛脚が西へ、大坂の洪水を報せる飛脚が東へ、箱根峠で2人の飛脚が出会った。さてどうなったのでしょうか。ジュー」というもの。飛脚が災害情報を得意先に発信した事例はすでに拙著『江戸の飛脚』でも扱ったが、この小話は飛脚の特色をよく表すものであると言っていい。

落語の中の飛脚は、至って滑稽でユーモラスな存在である。落語の題材に取られるぐらいだから、それだけ話す方も聴く方にも、いかに飛脚という存在が具体像を伴って膾炙していたかがわかる。それにしても「明石飛脚」「堺飛脚」は宰領飛脚が出てこず、走り飛脚のみ登場する。走り飛脚の姿は江戸時代の人々にとっても飛脚そのものを象徴した姿であったのであろう。宰領飛脚を扱った落語についてはいまだに聞かない。

もう1つ興味深い点は明石飛脚を担った男の存在である。飛脚宿では全ての脚夫が出払っていて、商人は得意客に依頼した。このように専門の飛脚でない者が頼まれて臨時に飛脚を務める場面がままあったことを示唆する⁽¹⁰⁾。現代に喩えれば、企業タクシーではなく、個人の「白タク」のようなものであろうか。恐らくこうした個人営業的な飛脚が多くいたことを窺わせる。

7 狐飛脚伝説

江戸時代中期の俳諧師与謝蕪村(1716-83)の作品に「草枯れて狐の飛脚通りけり」(表1 No. 24)という句がある。「草枯れて」は冬の季語。黄金色の末枯れた枯れ野に「ザザー」と一陣の風が吹き抜けていく。枯れ草と同色の体毛の狐飛脚が人の目にも触れぬ神速で通り抜けたのであろう。そんな物悲しい風景が想起される。蕪村は明らかに狐飛脚の伝説を踏まえて作句している。作品からは蕪村が狐飛脚の“存在”に神秘性を抱いていたことが察せられる。

狐飛脚伝説は各地に伝承されている。県名で言えば、秋田、山形、神奈川、奈良、福井、鳥取、島根の7県、8カ所を数える。その多くが大名家にまつわり、狐飛脚を祀る稲荷社(6社)が2カ所を除いて城跡に鎮座するという点で共通している。本章では可能な限り、最も古い伝説の形を列記しながら、そこに込められた伝説の意味を読み解きたい。

(1) 志一稲荷

神奈川県鎌倉市には鶴岡八幡宮の西に志一稲荷神社(神奈川県鎌倉市雪ノ下2)がある。由来について貞享2年(1685)刊行の河井恒久友水纂述『鎌倉志』4巻(全8巻)に記述がある。

10 拙稿「江戸後期、村名主の通信環境—上野国那波郡福島村、渡辺三右衛門を事例に一」(『郵政博物館研究紀要』7、2016年)。この中で筆者は本業(職人〈仏師〉、鑄掛屋、餅屋)を別に持ちながら、臨時雇いで飛脚を務める事例を紹介した。

次に原文を掲げる。

志一上人石塔

志一上人ノ石塔ハ鶴ガ岡ノ西町屋ノ
後、鶯谷ト云所ノ山ノ上ニアリ、里
人ノ云、志一ハ筑紫ノ人也、^{うったえ}訟アリ
テ鎌倉ニ来レリ、已ニ訟モ達シケル
ニ文状ヲ本国ニ忘置テ如何セント思
ハレシ時、平生志一ニツカヘシ狐ア
リシガ、一夜ノ中ニ本国ニ往キ、明
曉彼ノ文状ヲクワヘテ帰り、志一ニ
奉リ、其ママ息絶テ死ケリ、志一訟
カナヒシカバ則チ彼ノ狐ヲ稻荷ノ神ト祭り祠ヲ立ツ、坂上ノ小祠是也、志一ハ管領源基氏
ノ代ニ上杉家崇敬ニヨリ鎌倉ヘ下ラレケルトナン、太平記ニ志一上人鎌倉ヨリ上テ、佐々
木佐渡ノ判官入道道譽ノ許ヘオハシタリ、細川相模ノ守清氏ニタノマレ、將軍ヲ咒詛シケ
ルトアリ⁽¹¹⁾



志一稲荷神社

鎌倉時代、筑紫国の僧侶志一が訴訟のために鎌倉に来ていたが、仕えている老狐に文書を持たせ、一夜のうちに使いをさせたが、志一の許に戻ると疲労の余りに死んでしまった。憐れんで祀ったのが志一稲荷である。狐の神速・死、呪咀との絡みなど後述の伝説の原形を思わせる。

(2) 出羽国の与次郎狐

平戸藩主の松浦静山（1760-1841）が執筆した随筆『甲子夜話』巻一に狐飛脚のことが記述されている。

是は昔のことなり。正しき物語と聞ゆ。羽州秋田に何狐とか云ありて、此狐人に馴て且よく走る。因て秋田侯の内にて、書信ある毎には、其狐に託して書翰を首に繞ひやれば、即江戸に通ず。其捷速を以て屢此獣の力を仮る。然に或時書信達せず。人甚疑ひ訝て其行塗を捜求むるに、途



与次郎稲荷神社(秋田県秋田市)

中大雪に傷しと見へて、雪中に埋れてありしとぞ。晋の陸機が犬の故事に類せることなり⁽¹²⁾。

上記の「秋田に何狐」とは、与次郎狐のことを指す。秋田侯とは初代秋田藩主の佐竹義宣（1570-1633）のことである。関ヶ原の合戦で西軍に与したため、常陸国から出羽国へと減知移封となった義宣が江戸との通信で使ったのが与次郎狐とされている。与次郎狐伝説の痕跡は、秋田県秋田市の久保田城跡の与次郎稲荷神社（秋田県秋田市千秋公園1-9）と、与次郎が死んだとされる山形県東根市に共に同名の与次郎稲荷神社（山形県東根市四ツ家1丁目2-11）として祀られており、地元ではよく知られた伝承である。秋田市には近年までもう1つ与次郎稲荷神社があったが、こちらは残念ながら住宅街の波に呑まれ、取り壊されてしまったという。

11 河井恒久友水纂述『新編鎌倉志』4巻（国立国会図書館デジタルコレクションにて閲覧）

12 松浦静山著、中村幸彦・中野三敏校訂『甲子夜話』1（平凡社、1977年）13頁

取り壊された稲荷社は足軽たちが集住する一角にあり、飛脚役を務めた足軽たちが勧請したものらしい。

与次郎狐について考察した菊地和博「伝説と史実の対話—与次郎稲荷神社と久保田城主佐竹義宣—」によると、最も古い伝承記録は文政元年（1818）から弘化2年（1845）にかけて成立した長山盛晃の「耳の垢」に紹介されたものだという。それに次ぐ文久3年（1863）から明治26年（1893）にかけて著された石井忠



与次郎稲荷神社(山形県東根市)

行の「伊豆園茶話」二十の巻には「耳の垢」から転載する形で伝説が紹介されているので次にそのまま引用する。

長山盛晃（伝左衛門、初専蔵）が『耳の垢』といふ記に、慶長九甲辰八月中御城御成就にて、天英公（佐竹義宣）土崎湊城より御移り、二、三日後御坐ノ間の御庭へ大狐出て、三百年来此神社の社の辺に住みしが、今は住処なければとて住むべき地たまはらむ事を願ふに、御茶園にて下さる。御遷封三十年程前、水戸の御茶園守りに与次郎といふものありしを思召出されて、即ち与次郎といふ名を此狐に賜ふ。斯くて江戸御飛脚六年相勤、最上六田駅にて悪もの間右衛門谷蔵等油鼠をかけ打殺されしは慶長十四年西七月下旬なりと、一村三百余人狂気となり、死するもの十七人（イノ三七人）、正気のもの只十人斗り也。御代官杉本伊兵衛江戸より態々下り八幡宮と祀りて祟り止しとぞ。今も御茶園辺に足の黒き狐あり。与次郎が子孫にて、与次郎御飛脚勤めし時黒脚半の名残といふ。此近辺菜園の瓜茄子狐のとり時、御茶園の与次郎が手作と書きたる札を立つれば、曾て狐障る事なし云々。扱、今の北の丸御初蔵（寛保三亥夏五月建）の地に先年金乗院ありて、其境内に与次郎稲荷の社ありて、金乗院に祭らしめたまふとぞ。御初蔵建られし後も尚此頃まで小祠ありし也。又其近処八幡坂の上御初蔵より行当りに御足軽番処ありて、其内に神壇を設け与次郎稲荷を祀る。是は御足軽の私に勧請せしとぞ。県になりてそれを入川橋に遷す。其時御小人の方に遷さんといふを、御足軽の由緒の古書付ありて御小人へ不譲などの噂ありし也。此の『耳の垢』にある与次郎が事おのれ『秋藩旧話』に写し置きぬ⁽¹³⁾。



与次郎の墓とされる。墓石は殺害場所から出土したという（与次郎稲荷神社境内西北）



与次郎狐が殺害されたとされる場所(東根市中央2丁目17-14西原大明神裏)

ありて、其境内に与次郎稲荷の社ありて、金乗院に祭らしめたまふとぞ。御初蔵建られし後も尚此頃まで小祠ありし也。又其近

処八幡坂の上御初蔵より行当りに御足軽番処ありて、其内に神壇を設け与次郎稲荷を祀る。是は御足軽の私に勧請せしとぞ。県になりてそれを入川橋に遷す。其時御小人の方に遷さんといふを、御足軽の由緒の古書付ありて御小人へ不譲などの噂ありし也。此の『耳の垢』にある与次郎が事おのれ『秋藩旧話』に写し置きぬ⁽¹³⁾。

与次郎狐が秋田—江戸の飛脚を6年間務めたが、最上六田で間右衛門と谷蔵により罫にかけ

られ謀殺されたことが記される。その後、六田で狂気の者が出て、死去した者が17人（または37人）を数えたという。代官杉本伊兵衛が八幡宮に祭祀したところ、「祟り」が止まったとある。静山の記述とは、与次郎死去の場面が異なる。また秋田県と山形県とでは伝承内容に異なる点もあり、山形県では与次郎殺害の動機について、問屋旅店を経営していた問右衛門が商売の邪魔だとして謀殺したと伝わる。また異にかかった与次郎が獵師の谷蔵に命乞いをするが、許されずに殺された経緯も挿入されている⁽¹⁴⁾。

与次郎稲荷神社氏子総代の結城幸男氏（責任役員）と山口建策氏（総代表）の案内で稲荷神社近くにある与次郎殺害の場所に赴いた。過去に「殺害現場ならば骨が出てくるのではないかと掘ったところ、実際に楕円形の石が出土したため、「これは与次郎の墓だ」として与次郎稲荷神社境内に移され、拝殿西北裏手に祭祀された。

(3) 右近・左近の狐飛脚

同じ出羽国内の米沢にも狐飛脚伝説が存在する。米沢城跡に鎮座する上杉神社境内に福德稲荷神社（山形県米沢市丸の内1丁目4）がある。ここは右近と左近という狐飛脚を祭祀した社である。

御城代邸の稲荷の祠

英徳公（筆者注、上杉宗房）鶴御拝領有て例の如く、着到否や御請の飛脚立たり、然るに翌日に成て御右筆所にて御請の本書を見出したり、是は如何にと評するに案書を封し渡したり、如何にせんと惘れけるか御答は無據早く披露すへしとて奉行處へ申出てしかは奉行衆も當惑せられけるか、折節御城代岩井大膳元則飯縄の法を修せられたり、最早人力にては及ひかたければ大膳へ相談して見るへしとて大膳を呼出し、其譯を語り何れか兼日の修法にて御大方の欠けぬ様は有やと有ければ、成程修め見るへしと、扱其本書を先へ御渡の通にして御渡有へし、其御状箱を首に掛る様にして渡されよとて大膳は壇を飾りて修せられけるに不思議や狐一疋出て来る、是は御城内に住む右



右近と左近の狐飛脚を祀る福德稲荷神社(山形県米沢市)。左奥にも鳥居と奥の宮がある



福德稲荷神社奥乃宮内部。狐は一對のうちの1つ

近左近と云二疋の狐の其一にて有しとそ、則其狐の首に右の御状箱を掛られけるか忽に走り出したり、翌日の晩程に其狐又状箱を首に掛けて元の庭前へ來れり、夫を取けるに狐は其儘倒れ死せり、則御状箱を差出されければ、則開き見るに實に案書を封し入てあり、扱飛脚下着して如何に不思議有やと尋ねられけるに何成共覚なしと云去れば状箱の間違の始終を語り聞せられし

13 井上隆明、田口勝一郎、渡部綱次郎編『新秋田叢書』10（歴史図書社、1972年）28頁。

14 前掲菊地論考。

に暫く思案し思ひ当たる事の候所は古河の邊にて松原の中にて頬に睡み気さし堪難ければ、兩人共に松木に寄りて少し間眠むと思ひしに何やら首に礮と當りしに驚て見覚め見れば御状箱に變りなし、夫より目も苦々成て急きぬ、此時取替られしやと云、扱其狐は大膳申立て御城代第の内へ稲荷の號を以て祝ひけるとそ⁽¹⁵⁾(読点は筆者、一部当用漢字に改めた)

米沢領の長井の城代屋敷にあったという稲荷があり、城代の岩井大膳は飯綱の法を修して、右近と左近という2匹の狐飛脚を使っていた。ある時、幕府へ出す御状箱に誤って下書きの方を入れてしまった。城内は大騒ぎとなり、そこで大膳が呼ばれ、第二の御状箱を狐飛脚の首に付けて発したところ、一昼夜のうちに役目を終えて帰って死んでしまった。古河辺りを本物の飛脚が走っていたが、睡魔に襲われて路傍で寝てしまった。すると首にはたと当たる音がした。御状箱を開けてみると異常がなかった⁽¹⁵⁾。

(4) 松本の狐飛脚

長野県松本市にも狐飛脚の伝説が伝わる。信州松本の殿様も家来に狐があつて、江戸への使いに3日で間に合ったという。いつも道中の茶屋で休んでいたが、勘定を払うのを忘れるため、ある時、追いかけて勘定を払ってもらった。茶屋の者はもしや狐ではないかと疑い、罌に油揚げを片隅に置いておくと狐飛脚が食いついた。狐は打ちのめされて殺された。柳田が指摘するように松本—江戸に片道3日はさほど速いとは言えない。「3日」に敢えてこだわると、他地域における狐飛脚伝説が「松本」に置き換えられて、そのまま「3日」のまま言い伝わった可能性が指摘し得る。

(5) 狐飛脚の源五郎

大和国宇多には源五郎(柳田の「狐飛脚の話」では源九郎)狐の伝説が伝わる。延宝年間(1673-81)、源五郎狐は近所の農家から頼まれては畑仕事の手伝いをしていたが、2、3人分の働きをしたという。ある時、関東の飛脚から頼まれて文箱を届けることになったが、源五郎は10日以上かかることを往復7日で用を片付けた。源五郎は畑仕事のほか、飛脚も頼まれるようになったが、飛脚の途中、帰りの小夜の中山で犬にかまれて死んでしまった。首にかけていた文箱はその後まもなく大和へ届けられたという⁽¹⁶⁾。

(6) 八助稲荷

若狭國小浜にも狐飛脚の伝説が伝わる。小浜藩初代藩主の酒井忠勝(1587-1662)を祭祀する小濱神社境内(福井県小浜市城内1丁目7-55)には八助稲荷神社がある。『小浜神社誌』では次のように伝説を紹介している。

太守酒井忠勝公の御代に八助という仲間がありました。どこから来た者か又何時頃来た者か誰も知りませんが、ただ北の丸稲荷の御社近



八助稲荷神社(福井県小浜市)

15 石田勘四郎編『米沢古誌類纂』(羽陽活版所、1908年)

16 戀塚実『狐ものがたり』(三一書房、1982年)76頁。

傍で朝早く又夕暮れ時などに八助の姿を見ることがありました。此の八助は中々才智があり、忠実で何事を言付けても喜んで命に従い、然も敏速で当を得ていましたので、八助々と人々に重宝がられて仲間同志の気受けもよかった。此の八助は太守江戸御在府の時など公用の文箱を持って小浜、江戸の間を往復の使いをすること度々であったが、いずれの時も間違いなく御用を果し、然も普通の人十五日かかる旅程を八助は六、七日で使いする事毎度であった。人々不思議に思いながら何事にも並々の人の成し能わぬことで、常々平気で成す者だから人々は感心して益々重宝に思うばかりであった。或人が八助に問うに汝江戸、小浜の間を六、七日に行くのは、どんな風にして行くのかと、八助答えて曰く別に変ったことはしていないが、私は大事な御用を仰付られ御奉公大切と存じ夜も宿屋などに泊らず、昼も夜も只歩き続けていますだけです。私は一日に一時間半もうつつと致せば六、七日の道中では疲労もしません。只相州小田原の町に年経たむく犬が一匹居ります。随分と猛犬で、この犬だけが私には苦手ですが、その他には道中恐ろしいものはございませんと言っていました。或る時江戸に使いしての帰り途に相州小田原の町を通り過ぎようとした時、横町から年経たむく犬が走って来てやにわに飛びついて遂に八助を噛み殺してしまいました。真夜中のことで誰も気付かず知る人もなかったのですが、夜が明けて町人がこれを知り大騒ぎになりました。見ると八助の体は白狐と変り、其頸に文箱をしかとくくり付けたまま死んでいました。人々は文箱を見て酒井若狭守家の紋がついているので之を役所に届出しました。これによって此の由を若狭へも知らせて来たので時の人々は様々に詮議した結果これは全く北の丸に御鎮座の稲荷大明神が八助と化し給い、太守の御信仰に報い奉ったものと云い、又否々稲荷大明神のお使いの白狐をして太守の御治国を守護し給うのだと。これよりこの御社を八助稲荷大明神と称え奉り今に至るも人々は尊崇来拝し昔日に変わることがないのである⁽¹⁷⁾。

酒井忠勝に仕えた八助という家臣は、江戸へ火急の書状を出す場合、小浜から江戸まで片道1週間かかるところを往復6日で届けたという。ある時、書状が江戸に届かないので、調べると小田原城下で酒井家の家紋の入った書状をくわえたまま死んでいた白狐が見つかった。八助の正体を知っていた忠勝は嘆き悲しみ、城内に稲荷社を建立し、城の鎮守としたという。それが現在、小浜神社境内にある八助稲荷神社とされる⁽¹⁸⁾。

如上の典拠は「社記より」と記される。小浜神社宮司の香川昇氏のご厚意により同社史料のコピーを提供していただいた。稲荷社の由来について次のように記される。

当社境内稲荷社ノ理由

当小浜神社ノ境内ニアル稲荷社ノ義ハ、本社ヲ距ル事凡ソ七町計東ニ当リテ、丸山ト称スル一小山アリ、往古桓武ノ朝、田村麻呂、此山上ニ於テ石長比賣ヲ祭り給ヘリト、故ニ麻呂山トモ云ヘリトソ、而テ后チ此祭場ニ小祠建立アリ、天文年間武田信豊此山頂ニ築キ、其族内内藤兵庫ヲシテ此ヲ守ラシメタリト云フ

伝聞ク当国武田ノ先代ニ太郎信広ト云ヘル壮士アリ、此人嘉吉年間トカ或ハ長祿中トカニ当リテ箱館ニ乱アルヲ聞キ、商船ニ乗り組ミ松前ニ渡リ蝦夷ト交戦大ニ勝利ヲ得タリト云フ、依テ想フニ其比当地ノ武田家ニ於テ報賽ノ為此小祠造立ハアリタルナランカ

17 赤見貞編『小浜神社誌』（1975年、2017年復刻版、小浜神社社務所）

18 杉原丈夫、石崎直義編『若狭・越前の民話』（未来社、1968年）、小浜市連合婦人会『ふるさとの昔話』（1974年、2006年復刻版）には、ほぼ同様の伝説の形で「八助稲荷」が紹介されている。前者は「はなし 小畑正平・赤見貞／採集 小畑昭八郎」とあり、後者の末尾には「話・赤見貞／採話・山本小春」とある。前者・後者ともに「八助稲荷」の伝説は赤見貞氏から採話されている。

天正十年織田家ニ於テ悉ク諸士ノ領地ヲ没シ、更ニ此ノ地ヲ丹羽五郎左衛門ニ賜フ、全十二年十月長秀彼ノ山上ナル小城ヲ毀タシムルト雖モ一殿山ノセハニテ小祠ハ存在シ置ケリト云フ、慶長年間京極高次当国ノ主トナリ爰ニ雲浜城ヲ築キ本丸ニ彼ノ山ヲ遷シ祭ラレタリト云フ、寛永年間酒井忠勝代リテ国主トナリ、此小祠ニ稻荷ノ神ヲ合祀セラレタリト古老口碑ニ伝フ、降テ明治八年小浜神社ヲ旧城本丸跡ニ創立シ、全十二年八月分社境内ニ此ノ小祠ヲ復旧祭祀セリ（読点は筆者。漢字は当用漢字で記した）

如上の稲荷社の由緒には八助のことは一切触れられていない。如上を訂正した「誤謬訂正願副申」（明治26年11月30日、当時の宮司江藤長裕氏の署名）には神社名を稲荷社ではなく、「雲浜神社」であるとしながら別の形で由緒を記しているが、いずれにしる八助のことは出てこない。明治初期に記されたとみられる「神社明細帳」の由緒には「古昔小浜城地ニ設置アリ、創祀年月等詳カナラス、酒井忠勝公若狭国襲封以降創建ノ由、古老口碑ニ伝フ書記類無キヲ以テ其縁由ヲ詳カニセス」（明治33年12月付）とあり、こちらも八助のことは出てこない。

前記の史料に基づき、香川氏は「八助の狐飛脚伝説は、明治以降に語られ始めたのではないかと指摘する。筆者は小浜地方のエピソードを記録した江戸時代の随筆集『拾樵雑話』（福井県郷土叢書、1957年）を調べたが、八助稲荷伝説に関する記述は見当たらなかった。よって香川氏の指摘は妥当であると思われる。

逆に小浜市では稲荷社と狐飛脚伝説がどうして結びついたのであろうか。恐らく狐飛脚伝説が何らかの形で小浜地方に伝わり、親から子、古老から子供へと口伝される際に結び付けられたのではないだろうか。このことは狐飛脚伝説のパターン（大名家に仕える狐、手紙を運び江戸と往復、不慮の狐の死と祭祀）の「伝わり方」を考える意味でも注目される。

（7）慶蔵坊稲荷

因幡国鳥取には慶蔵坊（経蔵坊、桂蔵坊）狐の伝説が伝わる。鳥取城跡2カ所に狐飛脚を祀る神社があり、鳥取県鳥取市鳥取城本丸から天球丸への坂下にある中坂稲荷神社（鳥取県鳥取市東町）と、鳥取県鳥取市久松山登山道五合目に鎮座する中坂稲荷神社である。

柳田国男の「狐飛脚の話」によると、慶蔵坊（桂蔵坊）狐は鳥取―江戸を2、3日で往復したが、因幡国で焼鼠の罠にかかって殺されてしまった。後に法印の占いによってそのことがわかった。それから鳥取城内に祠が建てられたという⁽¹⁹⁾。

慶蔵坊狐に関する伝説の最も古い記録は、江戸時代に成立した鳥取地方の伝承を集めた「鳥府志」の記述ではないかと思われる。次に全文を引用する。

中坂稲荷の社

御城山の正面の半腹に在り。此稲荷の名を慶蔵坊と称ふ。御領内にて狐の統領なりとの俗伝なり。此使令を尾白坊と云。惣て御城山の狐は尾の先白しと云へり。さて、此境地の入口へは華表（とりゐ）建て、両社相双べり。自寛永の御代の比には、此稲荷三日が程に御



狐飛脚の経蔵坊を祀る中坂稲荷神社（鳥取県鳥取市、鳥取城跡）

19 柳田前掲書69、70頁。

国の消息を江戸へ達せられ候由。かかる神変不測の靈狐なりしかども、畜類の境界は難免侍るにや、或時道中にて御状箱を頸に掛つつ締（わな）にかかりて死したりしと也。其後土俗に祟を成して、一村亡消せしかや。其国も所の名をも精く語りし人あれども記憶すべき程の事に非ば、今これを忘れてたり。余り童蒙の説なれども、旧しく邦俗の口に膾炙せる処なれば不泄。又貞享の御代、御隠居成されし後、中の丸へおはしましけるが、御殿の床下へ狐来りて子を産みける時には、いつも命あって赤飯など恵を給ふ事恒なり。然るに或夜狐御庭の家鴨を捕ければ、以の外に御機嫌損じ、何に獸類とは申ながら、兼ての恩をも不弁挙動、言語道断なり。向後は構ひ申まじとの御下知なりけるが、其夜御山殊外騒敷、翌朝御式台の前に一疋の狐を喰殺して有ければ、全く件の悪狐を慶蔵坊の罰せ



前頁の写真の奥に鎮座する石祠



中坂稲荷神社（鳥取県鳥取市久松山5合）

られたるもの成めと、皆人唇を翻へしける。又一説には、其前夜、松の丸の御番人の娘に依託して、此義は曾て慶蔵坊が知れる処にあらず。偏に野狐の所為なりけると陳じ被申けるが、果して翌朝には如斯に計ひありしとも云り。当時に於ても、事あらん前、御山の狐騒動せる事あれば、中坂稲荷の靈告にて有たるなど云はやして、世に是を尊信せり。さて此社へは正五九月に永江讃岐御浄として登山せり。其起源外神に同じ。又例歳初午の日、余多の灯籠をささげ、大胴を点じて祭祠せられけるは、御庭山の稲荷にして、中坂とは別社なり。又一説には文禄年間、鳥取の城主宮部善祥坊は、江州宮部の産にして、本は叡山の衆徒なりしかば、城内鎮護の為、この中坂へ慶蔵坊と云へる修験者を被置けるを、後年その名を誤て狐の名に呼ならはせけると云々。又山上に山伏の井と云へるは、彼桂（ママ）蔵坊などが掘りたる井ならん歟と云へり。又『夜話』には慶蔵坊とは、往古当山に居ける山伏の名なりと云。已前は苔むしたる五輪ありて、慶蔵坊が墓なりし云しと云々。此等の説みな精証ありや、無覚束⁽²⁰⁾。（傍線筆者）

伝説の箇所は傍線部の通りであるが、他の伝説と共通するように大名家に仕え、神速とされ、往来の途中で罨にかかって死去したという。罨にかかった場所の村は祟りをなして一村滅んだという。具体的に地名も伝わっていたようであるが、『鳥府志』の採話者はさほどのこともないと記憶しなかったようである。慶蔵坊は修験者であるとする見方を提示しているが、慶蔵坊が江戸期に狐飛脚伝説と結びついたのであろうか。

慶蔵坊と与次郎とは双方共に罨にかかって死去し、関わった村にたたったという点で共通する。与次郎稲荷伝説が鳥取に伝わったことを暗示するかのようである。狐飛脚伝説の伝わる秋

20 「鳥府志」上の天（『鳥取県史 第6巻 近世資料』（1974年）444、445頁

田、小浜、鳥取は共に日本海に面しており、江戸期に北前船の寄港地の近くに位置した。恐らくそうした海上交通を介して狐飛脚伝説が伝播した可能性が考えられる。

(8) 新左衛門新八狐

最後になるが、鳥根県松江市にも新左衛門新八狐の伝説が伝わる。伝説の形は不明であるが、柳田の「狐飛脚の話」によると、伝説内容は鳥取の慶蔵坊狐とほぼ同じであるという。名前から察して右近・左近のように2匹であろうと察せられる。

松江城内には城山稲荷神社（鳥根県松江市殿町449-2）が祭祀される。こちらは狐飛脚の伝承と関連して由緒が言い伝わっていない。だが、狐飛脚伝説のある場所はほぼ城跡に稲荷神社が祀られていることを考え合わせると、伝説のみ存在するのは不自然である。恐らく以前は狐飛脚伝説の縁起が伝わっていたのかもしれない。

狐飛脚伝説の事例を検討してきたが、全国各地に点在する狐飛脚伝説には概ね次の特徴が指摘し得る。

- ①狐飛脚を使う大名が登場する
- ②大名家の居城に棲む狐であること
- ③国許と江戸とを3日程度で往復（遠国だと片道だが）する
- ④途中で殺害されてしまう。
- ⑤城内に稲荷神社として祭祀される

①の大名については、佐竹・上杉・池田は外様大名であるが、松平・戸田・酒井は譜代大名であることから、特に狐飛脚伝説の所在に外様・譜代の区別はないようである⁽²¹⁾。城とワンセットのように狐飛脚伝説が語られるのは、江戸を基準とした遠国大名との関連が指摘できよう。遠い国許と江戸とを6日程度で往復するというのは、伝説が江戸時代に成立したこと、また譜代・外様に関わらず大名家が抱えた幕府との緊張関係をも窺わせる。狐飛脚の死後は大名家の居城、また家の鎮守となったことから、家の存続を大事と考える大名家の事情を反映しているものと考えられる。

総じて言えば、狐飛脚伝説発祥の要因として、人馬に頼った江戸時代当時の交通事情も密接に絡んでいたように思われる。柳田国男は「現代の交通文化に恵まれた人々には、もう想像もつかぬことになってしまったが、人が我能力の不足を最も痛切に意識するのはこの点であった。土地を異にするばかりにこれほどの出来事を、知らずにいるかと思うとなさけないような時が多かった」⁽²²⁾と記す。つまり人馬に頼った交通手段に起因する情報のタイムラグ、あるいは情報不知という事情を背景に狐が「飛脚」として奉公したのだと暗に指摘する。筆者も国許から遠く離れた江戸における“情報への希求”と“意思疎通のもどかしさ”こそが、外様・譜代問わずに大名家が狐飛脚を使う伝説として立ち現れたのではないかと考える。

なぜ狐と飛脚が結びついたのであろうか。狐飛脚は人知を超えた神業的な速さ、いわゆる神速さこそが妙である。一方、獣類としての狐は、人前に姿を見せたと思ったら、いつの間にかいなくなってしまう。そうした狐の持つ神秘性と、人間の飛脚の速さとが結びついたのではあるまいか。江戸時代の人々が飛脚に向けた眼差しには、文芸に見られる滑稽さとユニークさと同時に、あれほどの遠距離をなぜ短日数で往復できるのかという神秘性が共存していたのでは

21 菊地氏は、与次郎狐の背景として、関ヶ原合戦後の佐竹氏の置かれた微妙な政治状況と関連づけて論じているが、外様大名だからとは一概に言えなさそうである。

22 柳田前掲書67頁。

ないだろうか。狐が御状箱を首にかけて走る姿は、実際の走り飛脚ともイメージ的にだぶる。こうしたイメージが飛脚＝走り飛脚(馬荷を監督する宰領飛脚ではなく)という固定観念を人々に植え付けたのではないだろうか。それは佐川急便トラックの荷箱に描かれたひた走る飛脚の姿へと受け継がれたものと思われる。

最後に狐飛脚伝説は現在、どのような語られ方をしているのであろうか。出羽国秋田の与次郎狐の伝説は現在、秋田市と東根市で地域おこしに活用されており、秋田市では「与次郎駅伝」が毎年実施され、会場ではマスコットキャラクター「与次郎狐」の着ぐるみが登場して場を盛り上げている。また東根市でも与次郎稲荷神社境内で毎年10月の体育の日(今年は9日)に例大祭が催されており、2017年は剣道大会の奉納試合が開催されたほか、地元の東根中央小児童により与次郎狐の寸劇が上演された。また神社にはランナーの参拝者の姿もあるといい、改めて「スポーツの神様」として再認識されている。

おわりに

文学、芸能、伝説の随所に「飛脚」が登場し、江戸庶民にとって飛脚とは現代の我々が考える以上に身近な存在であったことが改めてわかる。飛脚が様々な形で江戸社会に膾炙した身近な輸送・情報通信手段であったことを理解していただけたのではないだろうか。高価な輸送料金と一部階層の者(武家、商人)しか用いることのできない、庶民には縁遠い存在であったというイメージ(郵便ほど身近ではない)を多少なりとも払拭し得たのではないかと思う。

文芸の性格によって飛脚の登場の仕方も異なる。俳諧では情緒に彩られ、川柳・狂歌ではユーモラス且つ滑稽に扱われる。落語では笑いが前提となるため、愛すべきおかしみを伴った姿として立ち現れる。江戸庶民は、紙上や舞台上で演出され、また口承で情報化された飛脚に触れる度に、日常目にする飛脚の姿と重ね合わせて、可笑しさと納得と共に神秘性を覚えたことであろう。

一方、狐飛脚伝説は、地理的距離を前提に日数をかけて商品や手紙を届けざるを得ない当時の人々にとって、そうした困難をたちまち解決してしまう超越的存在として、江戸社会の人々の憧れを象徴するものであったと思われる。黄表紙「早道節用守」「雲飛脚二代羽衣」はあたかも宮崎駿アニメ「魔女の宅急便」を想起させるかのような筋立てである。両作品に込められた江戸の人々の欲望を、現代の我々は航空便という形で享受している。黄表紙2作品は、まさに飛脚＝通信の未来予想図であったとも言うことができよう。

(まきしま たかし 古書肆 三度屋書房 代表)

【付記】鳥取県立公文書館の伊藤康氏、福井県小浜市の小浜神社宮司の香川昇氏には所蔵史料の閲覧の点で多大なご配慮を頂いた。また郵政歴史文化研究会第一分科会の石井寛治先生、分科会メンバーから貴重なご意見を頂いた。この場を借りて改めて謝意を捧げる。



与次郎狐の石像(秋田県秋田市中通4-1、千秋公園入口交差点前)

表1 飛脚を題材とした俳諧

No.	作品	作者	出典
1	秋立て相場飛脚や急覧	安井豊由	生玉万句(寛文十三年〈一六七三〉)
2	ひよつと飛脚に心ざす秋	西山宗因	西山宗因千句(慶安二年〈一六四九〉刊)
3	呼よせられて飛脚それぞれ	宗恭	天満千句(延宝四年〈一六七六〉)
4	はや飛脚舟と陸との其間	如見	天満千句(延宝四年〈一六七六〉)
5	行暮て飛脚は野辺の仮枕	志斗	江戸談林十百韻(延宝三年〈一六七五〉刊)
6	飛脚宿かはらぬ春の花咲て	友雪	大坂檀林桜千句(延宝六年〈一六七八〉刊)
7	あづけ置比は霜夜のかね飛脚	釈順座	物種集(延宝六年〈一六七八〉刊)
8	ちる花や次飛脚にて惜むらん		二葉集(延宝七年〈一六七九〉刊)
9	状箱を駿河の飛脚請とりて	沾	続猿蓑(元禄十一年〈一六九八〉五月刊)
10	初潮や鳴門の浪の飛脚舟	凡兆	猿蓑(元禄四年〈一六九一〉)
11	待宵の月に床しや定飛脚	景桃	続猿蓑
12	木陰見て心を涼む早飛脚		うたたね(元禄七年)
13	こまりけり砂地にかかる早飛脚		馬だらひ(元禄十三年)
14	ならべたり同じまくらに飛脚宿		もみぢ笠(元禄十五年)
15	おれがいきや夫(とと)夫という飛脚の子		すがたなぞ(元禄十六年)
16	待かねて為替の銀に青い息		花笠(宝永二年)
17	数百両紐しめて行く三度笠		十八公(享保十四年)
18	万両も馬の背からずかはせ金		十八公(享保十四年)
19	夕べ気の顔なぶり合ふ三度笠		朝熊嶽(享保十五年)
20	更けわたり眼の冴へて来る銀子飛脚		ひきぐさ(文政三年)
21	飛のりのもどり飛脚や雲の峰	与謝蕪村	蕪村句集
22	懇な飛脚過ぎゆく深雪哉	与謝蕪村	蕪村句集
23	ゆく年の瀬田を廻るや金飛脚	与謝蕪村	蕪村句集
24	草枯れて狐の飛脚通りけり	与謝蕪村	蕪村句集
25	松原は飛脚小さし雪の昏(くれ)	一品	沼波武夫『教員諸氏の為に』(俳味社、一九一二年)
26	寅の日に酒盛りし飛脚や		蟬の下(宝暦三年)
27	御飛脚の堀河出てなづな哉	黒柳召波(1727-1771)、蕪村高弟。清兵衛、京都の人	黒柳召波『春泥句集』(『古典俳文学大系』所収)
28	菜の花の中に糞ひる飛脚哉	夏目漱石	

注) No.1~11は国際日本文化研究センターデータベース検索、No.12~20は鈴木勝忠編『雑俳語辞典』(東京堂出版、1968年)、No.21~24は玉城司訳注『蕪村句集』(角川書店、2011年)

表2 飛脚を題材とした川柳

No.	作品	作者	出典	No.	作品	作者	出典
1	秋葉会江戸へ便りも月参り	ハマ松 一泉	柳多留	57	早飛脚品川までは帯をしめ		入江
2	あさつてはそばで見ますと鳥屋いひ		江戸砂子	58	早飛脚十五夜お月見てかける		入江
3	足を空雲駆走る御伏箱	十九丸	柳多留	59	早飛脚日限りの逢ふ川支へ	管子	柳多留
4	足がるに早ひきやくトハいい見立	亦楽	柳多留	60	はやり風十七屋からひきはじめ		柳多留
5	足軽に飛脚の役ハおもひつき	カシハ	柳多留	61	飛脚じゃアござりませんと櫛屋云ひ		江戸名物
6	足に能あり麩屋飛脚赤がへる	貫雨	柳多留	62	飛脚の子とつさんだのに人見知り	花雪	柳多留
7	足にのう連堀飛脚麩屋桶屋	メ丸	柳多留	63	飛脚の銭入早道に限るなり	竹成	柳多留
8	油揚を竹へはさんで早飛脚	百々爺	柳多留	64	飛脚の長尿一里余もたれおくれ	佃	柳多留
9	韋駄天へ飛脚中からとらの額	芝鶴	柳多留	65	飛脚に逢えと起すみどり子		武玉川
10	一生旅でくらすのに三度とは	梅里	柳多留	66	飛脚の息のかかる明星		武玉川
11	一日に十七人もたびへたち		柳多留	67	飛脚の顔をあおく女房		武玉川
12	うなされてむつくと起きる金飛脚		入江	68	飛脚の口のうる戒名		武玉川
13	おいそば屋と云つたら飛脚屋		入江	69	飛脚まで軽い意見を口移し		武玉川
14	御国への飛脚ていろは落字也	〇キ	柳多留	70	日限りの三度早馬で船をこぎ	紫	柳多留
15	廻状を心得たりとぼうでうけ	東子	柳多留	71	文使い嘘もまことも一つかみ		川柳大辞典
16	廻状の返事ハ棒を背負て行キ	可交	柳多留	72	文屋文屋アといふ程持つて出る		川柳大辞典
17	風の神先ず馬下りが十七屋		武玉川	73	文屋どんもうござんたと女房いひ		川柳大辞典
18	合羽と桐油紙籠のやうに見へ	梅鳥	柳多留	74	ばたもちを飛脚へ出して物語		柳多留
19	金飛脚ぼうぼうとして役所へ出		入江	75	松の木へしばられて居る金飛脚		柳多留
20	金飛脚金を渡して月代し		入江	76	明州へ月の飛脚の三笠山	叶	柳多留
21	金飛脚状をよむ内とさら出シ		柳多留	77	目の前で盛つて飛脚へ膳を出し		川柳大辞典
22	鎌倉からの早打ハまぼし魚	志夕	柳多留	78	夕立は十七屋から京へ知れ		江戸砂子
23	川留にかまはぬ蘇武が早飛脚	山八	柳多留	79	百合若と蘇武の飛脚ハ羽根て行	蛙柳	柳多留
24	川どめの状を式人でよむにくさ		柳多留	80	吉原へてんねき配る十七屋		江戸砂子
25	刻限も寅にかけ出す早飛脚	蛙水	柳多留	81	和の飛脚漢の飛脚と組で落ち	麴丸	柳多留
26	高麗狗にかぶらせ替む三度笠		川柳大辞典	82	龍宮の飛脚に走る飛ヒの魚	巴菊	柳多留
27	座禅豆飛脚のぜんをとびあるき	艸麥	柳多留	83	扱ふしぎ足の遅いを飛脚蠟		新編柳樽 (弘化二年)
28	さつぱり夜が明けて出る金飛脚		入江				
29	三度笠あれだあれだとゆりをこし		柳多留				
30	三度笠犬にあつておがんでる		柳多留				
31	三度笠乗合船の木の子苞	竹丸	柳多留				
32	三度笠村一ばんの書てなり		柳多留				
33	三度笠目あてにふらりふらり行き	口喜	柳多留				
34	三度ねらつて鑓先で寄歩取	蓬萊、五游	柳多留				
35	三度飛脚に去り状が着く		武玉川				
36	三度飛脚は馬上にて舟をこぎ	高麗	柳多留				
37	宿次の状を天拝山で持ち	叶	柳多留				
38	十七屋とてんはいかにわたるまし		柳多留				
39	十七屋日本の内はあいといふ		柳多留				
40	十七屋もめん合羽へ馬を入し		柳多留				
41	十七屋いつぱしの鳥の気で歩き		入江				
42	十七屋立横に寝る人斗		武玉川、江戸砂子				
43	十七屋一町遠く富士を見せ		江戸砂子				
44	十七屋ほど見さん配るなり		江戸砂子				
45	十七屋まめかまめかをつんで置き		露丸評万句合(宝暦年間)				
46	師走の飛脚長い脇差		武玉川				
47	ずつしりと寝返りをする金飛脚		入江				
48	外がはま蘇武が飛脚が風呂を立て	麴丸	柳多留				
49	蘇武が飛脚を由利雅が飛脚取	佃	柳多留				
50	鷹と鴈和漢飛脚を相勤メ	清屎	柳多留				
51	旅と思わず飛脚出て行く		武玉川				
52	知章程三度飛脚は馬で漕	佃	柳多留				
53	独身の飛脚店賃只取られ	メ丸	柳多留				
54	寅の日をあらんで飛脚髯を取	兎禿	柳多留				
55	投ケ込んだ廻状棒で一ト受け	慶秀	柳多留				
56	鉢巻で飛脚の戻るはやり風		入江				

注) 「柳多留」は岡田甫校訂『誹風柳多留』全十二巻(三省堂、一九九九年)、「江戸砂子」は今井卯木『川柳江戸砂子』(西濃印刷会社岐阜出版部、一九一二年)「入江」は入江勇『飛脚屋・駕籠かき・船頭など』(『国文学 解釈と教材の研究』九、一九六四年)、「江戸名物」は西原柳雨『川柳江戸名物』(春陽堂、一九二六年)、川柳大辞典は大曲駒村編『川柳大辞典』上下巻(高橋書店、一九六二年)、「武玉川」は山澤英雄校訂『武玉川』全四巻(岩波書店、一九八四、八五年)

表3 飛脚を題材とした狂歌作品

No.	作品	作者	出典
1	水かへる佐渡の嶋やの穴蔵はかはせ包みの金も出けり	雪屋	狂歌江都名所図会初篇
2	おこたりし嶋や飛脚の届け先しりをほるのも三年限り	松代 藤少々波樹	狂歌江都名所図会初篇
3	こくちには縄も千鳥にかよはせて淡路嶋やのなみの送り荷	スンプ 松経舎	狂歌江都名所図会初篇
4	のほせ荷の改め判もおし小路京やか出す請とり手形	松の門鶴子	狂歌江都名所図会初篇
5	松坂の嶋やてふ名の飛脚やにいせより来たる状も配りつ	玉川亭改 呉竜軒愛成	狂歌江都名所図会初篇
6	室町に御所の名ありて送り文ゆきとゝきたる京やふさはし	滝のや清麻呂	狂歌江都名所図会初篇
7	呉服店仕立飛脚のあつらへも布の嶋やそのひちゝみなき	花屋	狂歌江都名所図会初篇
8	股引の目くら嶋やの定飛脚またにかけてそありくうまや路	厚丸	狂歌江都名所図会初篇
9	すけ笠の月に三度の京やからいそぎ飛脚も出る十日限り	海のや広志	狂歌江都名所図会初篇
10	京やより出る飛脚もいそくほとあしも多かるあしにまかせん	三輪園甘喜	狂歌江都名所図会初篇
11	文字文字とせすて飛脚のはしり書京やより出る赤紙の状	伶月舎	狂歌江都名所図会初篇
12	急便りのほる京やの飛脚にも走り出してたのむ封状	春のや	狂歌江都名所図会初篇
13	短冊の荷札をつけて京やから七日かきりの花の都路	語吉窓喜樽	狂歌江都名所図会初篇
14	碁盤目の京やは四九の先手後手打て違ひにたつ定飛脚	楽月庵町住	狂歌江都名所図会初篇
15	都へとのほる京やの定飛脚しひれをきらす雪の朝立	道草	狂歌江都名所図会初篇
16	あちこちへあしをはかりにかけまはる人も目方てつかふ飛脚屋	門並	江戸名物百題狂歌集
17	早状の印にもみちの色みせて時雨ふる日もめくるひきやくや	和多守	江戸名物百題狂歌集
18	川留に飛脚はあふてその状の月日さへみぬさみたれの空	千秋	江戸名物百題狂歌集
19	むらさきのゆかりの花の江戸へくもてにものを配る飛脚屋	下仁田 春駒	江戸名物百題狂歌集
20	雁皮紙に書しもあらんふみをもて霞か関を過るひきやく屋	下仁田 待人	江戸名物百題狂歌集
21	かへる雁空に見なして北国の吉原へしもいそく飛脚屋	岩戸 山高	江戸名物百題狂歌集
22	亀戸なる藤の便りもむらさきの江戸の飛脚へたのみこそすれ	裸虫	江戸名物百題狂歌集
23	蓬萊の島屋かもとに鶴ならていたゝき赤き早状も見ゆ	仙フ 唐丸	江戸名物百題狂歌集
24	時つけの飛脚より猶はや手風吹こして行あしからの関	峰桜雪兼	狂歌杓子栗

注) 出典はいずれも江戸狂歌本選集刊行会『江戸狂歌本選集』12巻(東京堂出版、2002年)、同13巻(2004年)に所収